

# 自立活動の学習評価に基づく「3年後の姿」の評価

— 重度・重複障害のある子どもの指導実践を通して —

相良 知恵子  
(長崎県立佐世保特別支援学校)

一木 薫  
(福岡教育大学)

古川 勝也  
(西九州大学)

KEY WORDS : 自立活動 3年後の姿 評価

## I 目的

特別支援学校の教育では、子どもの長期的な変容を描き、個別の教育支援計画との関連を踏まえた個別の指導計画に基づく授業実践が求められる。しかし、現状としては、個別の教育支援計画に記した長期目標を踏まえた自立活動の個別の指導計画の作成や、授業の学習評価を個別の指導計画の評価へ還元する取組は見られる一方で、学習評価に基づき個別の教育支援計画に記した長期目標そのものを評価、修正する営みは確立されているとは言い難い。

そこで、本研究では、個別の教育支援計画の長期目標「3年後の姿」を踏まえた自立活動の指導実践と、学習評価を自立活動の個別の指導計画はもとより個別の教育支援計画の「3年後の姿」の見直しに還元した実践を報告する。

## II 方法

### 1. 対象児

自立活動を主とした教育課程で学ぶ小学部2年男児。

### 2. 自立活動の目標設定の手続

下記①～⑤の手順で自立活動の指導目標の設定を行った。

①指導開始時点での実態把握：6区分26項目、諸検査、学校及び家庭生活全体等を踏まえた実態把握を行った。

②今年度の自立活動の課題の選定

③学びの履歴の把握に基づく課題の精選：就学前は日中眠ることが多く生活経験に乏しかった。1年間の指導を経た前年度1年生修了時には、姿勢保持の力が向上し、安定した姿勢で学習に参加することが増え、周囲の人に注意を向ける力の高まりが見られた。さらに、明確な快の表情や発声の増加、表出の広がりへとつながり、物への関心の芽生えも見られるようになった。以上の学びを踏まえて課題を精選した。

④卒業までに身につけてほしい力に基づく課題の精選：1年次に、本校の伸ばしたい力、身につけてほしい力を踏まえて個別の教育支援計画に記載した「3年後までに育みたい力」とその達成状況 (Table1) を勘案し課題を精選した。

⑤課題関連図の作成と中心課題、指導目標の設定：③、④の手続きを経て作成した課題関連図 (Fig. 1) から、「体幹に適度な力を入れることができず、姿勢が崩れやすい」と「人には目を向けるが、提示された物を見るのが少ない」がその他の様々な課題と関連し、それらの要因となっていると考えた。そこで、指導目標を「教師の肩、背中、腰の援助を受けて、頭部を30秒程度適度な位置で保ちながらあぐら座位を保持することができる」「教師が提示した教材や玩具を5秒程度見続けることができる」と設定した。

## III 結果と考察

小学部2年修了時の評価は次のとおりである。

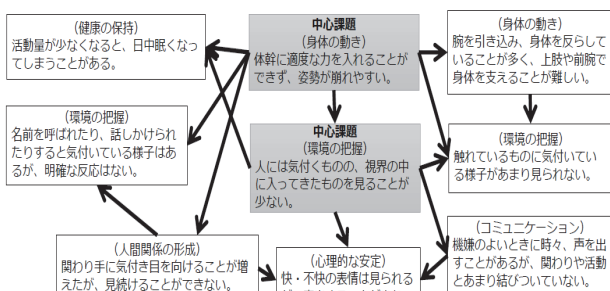


Fig. 1 課題関連図

・骨盤を十分に起こすことはできないが、適度な位置で頭部と体幹を保持して、30秒程度あぐら座位の姿勢を保持することができた。

・提示した教材に気付くことが増え、動きや音のある教材であれば、5秒程度見続けることが5割程度できた。

中心課題とした姿勢保持の力の向上により、安定した姿勢で学習に参加できるようになった。また、見る力が高まったことにより、教師が提示した教材に注意を向けて学習することが増えるなどの変容につながったと考えられた。

Table1に「3年後までに育みたい力」に照らし合わせた2年修了時の達成状況を示した。「3年後までに育みたい力」を身に付けるためには、自立活動の指導では、上肢で体を支える力や体幹を保持する力をさらに高め、片手で物を操作しても姿勢を保持できることや、頭部を起こす力を高め、手元にあるものに視線を向けても姿勢を保持できる力、物を見続けてその音や変化に気付くことなどを培う必要があると考えた。現段階の実態から、1年次に立てた「3年後までに育みたい力」を身につけるのは難しいと判断し、年度末の面談で保護者と相談の上、来年度1年間で育みたい力①を「座位保持いすや立位台のテーブルに手をつけて顔を上げ、教師の上肢への援助を受けながら物を触ったり、教師が提示したものを見続けたりすることができる」に修正することとした。

自立活動の指導においては、現在の姿だけに注目するのではなく、これまでの学びの履歴や、「3年後までに育みたい力」、卒業までの在学期間を踏まえて指導を組み立てることが必要である。本研究では、自立活動の指導における学習評価を学校生活全体で「3年後までに育みたい力」の評価に還元し、達成状況の評価と必要な軌道修正を図った。子どもの長期的な変容を見通した授業実践には、個別の指導計画に基づく授業実践のPDCAサイクルに「3年後までに育みたい力」の評価を位置づけ、計画立案時に描いた姿そのものの評価及び軌道修正を行う手続きを担保することが重要不可欠と考える。次年度は修正した「3年後まで育みたい力」の達成を目指して、姿勢保持を安定させて手を動かすことや対象を見ることを向上させていきたい。人や物へ注意を持続できるようになることで、次の「3年後までに育みたい力」に必要となる他者とやりとりをすることにつなげていけるのではないかと考える。

(SAGARA Chieko, ICHIKI Kaoru, FURUKAWA Katsuya)  
Table1 1年時設定に設定した、学校生活全体で取り組む3年後までに育みたい力の達成状況

3年後までに育みたい力	1年	2年
①座位保持いすや立位台のテーブルに手をつけて顔を上げ、教師の上肢への援助を受けながら押ししたり引いたりして動く簡単な玩具などで、10分程度遊んで過ごすことができる	座位保持椅子でテーブルに手をつけて、顔を上げて姿勢を一定にしておくことができるようになった。	座位保持椅子で、姿勢を一定にして目の前に提示した玩具や教材に数秒目を向けることができるようになってきた。
②身近な友達や大人に働きかけられたときに、相手の顔を見たり表情を変えたりして応えようとする事ができる	目の前に教師に気付くと数秒見たり、表情をゆるませたりすることが増えた。	働きかける教師に目を向けることができるようになった。感覚刺激を伴う遊びでは、関わる教師に目を向けながら表情をゆるませることが増えた。
③1時間程度の時間に必要な分の食事を摂ることができる	安定した姿勢で食べることが増え、時間内に一定して5割程度食べることができるようになった。	一定時間に、8割程度食べることができるようになった。